

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：31104

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04236

研究課題名（和文）包括的な相談支援体制での独立型社会福祉士によるコーディネートの有効性

研究課題名（英文）Effectiveness of Coordination by Independent Certified Social Workers in a Integrated Community Care System

研究代表者

小川 幸裕（Ogawa, Yukihiro）

弘前学院大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：90341685

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：独立型社会福祉士によるコーディネートは「アドボカシー活動」「住民支援活動」「専門職支援活動」「行政支援活動」の4つの概念から構成され、経済的安定と活動の質担保が重要な要素となっていた。独立型社会福祉士によるコーディネートのプロセスは「地域・組織アセスメントによる課題発見」を契機に「既存の会議体を活用した課題の可視化・共有化」を図り「支援関係者が集う場づくり」をつうじた「地域への課題発信」が確認された。独立型社会福祉士によるコーディネートの有効性として、独立性と中立性が保障された事業形態、専門職と市民の両面から地域の歴史・文化・慣習・支援関係組織の構造理解、地域に根づいた協働が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として、これまで明らかにされていなかった独立型社会福祉士のコーディネート活動の実態把握とコーディネートの構造および関連要因、コーディネートプロセスの抽出、コーディネートに関する成功要因と阻害要因を提示できた。社会的意義として、独立型社会福祉士によるコーディネート活動の可視化および環境条件を明らかにしたことで、包括的相談支援体制での独立型社会福祉士の活用に向け支援関係機関や職種、国民にその活用の有効性を提示することができた。また、独立型社会福祉士に関する研修プログラムの作成や社会福祉士賠償責任保険の補償内容の見直しの資料とできる。

研究成果の概要（英文）：Coordination by Independent Certified Social Workers consisted of four concepts: advocacy activities, resident support activities, professional support activities, and administrative support activities, with financial stability and quality assurance of activities being important factors. The process of Coordination by Independent Certified Social Workers was confirmed to be “identifying issues through community/organizational assessment,” which led to “visualization and sharing of issues using existing meeting bodies,” and “communicating issues to the community” through “creating a place where people involved in support can gather. The effectiveness of coordination by Independent Certified Social Workers was confirmed to be a business form that guarantees independence and neutrality, an understanding of local history, culture, customs and structures of support-related organizations from both professional and citizen perspectives, community-based collaboration.

研究分野：社会福祉

キーワード：独立型社会福祉士 コーディネート 包括的相談支援体制 アドボカシー

1. 研究開始当初の背景

生活課題が多様化・複雑化するなか制度化されているサービスでは対応が困難な制度の狭間にある課題への対応が急務となっている。制度の狭間にある課題の解決には、地域における包括的な相談支援体制を構築し、多機関・多職種をコーディネートできる人材が求められている。しかし、既存の福祉専門職は福祉関連サービスの提供にとどまり、制度の狭間にある課題の解決に向けた新たな社会資源の創出や仕組みづくり、地域住民を巻き込んだ地域づくりなどは不十分な状況がみられる。このような中、既存組織から独立し多機関との協働を基盤に継続的・分野横断的・包括的な相談支援を展開する独立型社会福祉士の実践が広がっている。

2. 研究の目的

制度の狭間にある課題の解決には、制度にもとづくサービスの提供や新たな社会資源の開発に加え、多機関との協働を基盤とした包括的な相談支援体制の構築が求められている。独立型社会福祉士は、地域特性に応じた継続的・分野横断的・包括的な相談支援によって、制度の狭間にある課題への対応を可能としている。この新たな包括的支援体制において、独立型社会福祉士は制度の狭間にある課題解決に有効に機能するコーディネート人材と考えられるが、その有効性については検証されていない。そこで、本研究では量的調査および質的調査の両面から、包括的な相談支援体制での独立型社会福祉士によるコーディネートの有効性について検討した。

3. 研究の方法

(1) 独立型社会福祉士によるコーディネートの実態把握および構造と関連要因

調査対象は、公益社団法人日本社会福祉士会の会員名簿所属先種別コードが独立型社会福祉士に該当する社会福祉士 1,247 名とし、無記名自記式の郵送調査を実施した。有効回収率は 39.9% (N=490) で、調査期間は 2019 年 5 月 7 日から 6 月 20 日とした。分析方法は、独立型社会福祉士のコーディネート活動を構成する因子を検討するため探索的因子分析(プロマックス回転・一般化最小二乗法)を行った。また、個人特性を独立変数に設定し抽出された各因子の得点を従属変数とする重回帰分析を行った。個人特性の集計および探索的因子分析は SPSS29.0 を用いた。因子分析は、個人特性 9 項目およびコーディネート活動 30 項目において 1 項目でも無回答があった 73 票をリストごと除外し、417 票(調査対象者の 33.4%、回答者の 85.1%) のデータを用いて分析を行った。

(2) アドボカシーを基盤としたコーディネート活動の特徴

独立型社会福祉士のコーディネート活動においてアドボカシーが重要な概念となっていることに着目し、アドボカシー概念を基盤とするコーディネート活動プロセスを抽出する場面として法定後見活動を取り上げた。調査対象者は、2007 年から 2017 年の間にインタビュー調査を行った 97 名の独立型社会福祉士のうち、個人事務所を開設し活動していること、調査時において法定後見を 5 件以上受任していること、独立型社会福祉士としての活動年数が 3 年以上であること、独立型社会福祉士の名簿登録者であることの 4 つの要件を満たす独立型社会福祉士 46 名とした。データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。

(3) 独立型社会福祉士によるコーディネート活動プロセスおよび成功要因と阻害要因の抽出

調査対象者は、独立型社会福祉士のうち、独立型社会福祉士としての活動年数が 5 年以上であること、地域住民、専門職、行政とのコーディネート活動に取り組んだ経験があること、独立型社会福祉士の名簿登録者であることの 3 つの要件を満たす独立型社会福祉士 6 名とした。インタビューは、半構造化インタビューを用いた。インタビューの内容は、現在の活動内容、コーディネート活動に関する取り組み、コーディネート活動の成功要因と阻害要因などを中心にインタビューした。インタビューはそれぞれ、1 回 1 時間半から 2 時間実施し、2023 年 1 月から 3 月の期間に実施した。すべてのインタビューは IC レコーダーで録音した。コロナ禍の状況に配慮し、対象者については許可を得た Zoom での面接とした。逐語記録を分析対象とし、定性的コーディングを用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 独立型社会福祉士によるコーディネート活動

1) 独立型社会福祉士によるコーディネート活動の取り組みの実態

独立型社会福祉士によるコーディネート活動は、本人や関係機関との関係形成や情報収集、社会資源への接続といったコーディネートの基盤となる活動への取り組み度は高かったが、コーディネートにむけた専門職、行政、住民への働きかけは低かった。生活課題を抱える人を関係機関や制度につなげている割合は約 7 割を占めるため、本人に必要な社会資源に関するコーディネートは確認できたが、コーディネート先となる住民、専門職、行政への支援に関する取り組み

は十分ではないことが確認された。

2) 独立型社会福祉士によるコーディネート活動の構造

独立型社会福祉士によるコーディネートに関する活動の因子分析をおこなった結果、独立型社会福祉士によるコーディネート活動は、「住民支援活動」「アドボカシー活動」「専門職支援活動」「行政支援活動」の4概念で構成されていることが確認された。独立型社会福祉士は、アドボカシー活動を基盤として住民、専門職、行政担当者のエンパワメントをつうじてコーディネート活動に取り組んでいることが確認された。

3) 独立型社会福祉士のコーディネート活動における各因子を規定する要因との関連

独立型社会福祉士の個人特性を独立変数に設定し、抽出された各因子の平均得点を従属変数とする重回帰分析を行った。結果、年齢が若い独立型社会福祉士のほうが「アドボカシー活動」の活動度が高いこと、年収が高いほうが「アドボカシー活動」「専門職支援活動」「行政支援活動」の活動度が高いこと、独立型社会福祉士名簿に登録しているほうが「住民支援活動」「アドボカシー活動」「専門職支援活動」の活動度が高いことが確認された。独立型社会福祉士のコーディネート活動に影響を与えている要因として「年齢」「年収」「名簿登録」が確認された。独立型社会福祉士のコーディネート活動を支える環境整備として、事業体の独立性の確保にむけた経済的安定と活動の質を担保する研修受講が重要であることが確認された。これまでの独立型社会福祉士に関する研修は、独立開業後のソーシャルワーク実践の質担保に関する内容が中心であることから、今後は事業体の独立性確保に関する内容の充実が求められる。また、コーディネート活動の基盤となるアドボカシー活動は、若年の独立型社会福祉士によって取り込まれていることから、40～50代の独立開業支援や独立開業後のフォローアップ体制の整備および社会福祉士賠償責任保険の補償内容の見直しの必要性が示唆された。

(2) アドボカシーを基盤としたコーディネート活動の特徴

独立型社会福祉士によるアドボカシーを基盤としたコーディネート活動の特徴として、住民支援・専門職支援・行政支援をおこなう「場」としてチームとネットワークが形成されていることが確認された。アドボカシー活動を基盤とすることで、日常業務をとおした地域住民・専門職・行政との信頼関係を基盤に形成されたチームとネットワークの「場」の創出が促進されていた。これらの「場」は人と社会資源をつなぐ機能にくわえ、本人意思を特定の支援者だけで把握するのではなく地域住民を含む支援関係者で把握・共有・支援する機能をもつこと、本人だけでなく支援者も支えられる機能をもつことが確認された。

(3) 独立型社会福祉士によるコーディネート活動プロセスおよび成功要因と阻害要因の抽出

1) 独立型社会福祉士によるコーディネート活動プロセス

包括的相談支援を行う独立型社会福祉士へのインタビュー調査を行った。結果、「地域・組織アセスメントによる課題発見」を契機に「既存の組織体・会議体を活用した課題の可視化・共有化」を図り「支援関係者が集う場づくりとエンパワメント」をつうじ「地域への課題発信」に至るコーディネートプロセスを可視化することができた。これらのプロセスの促進要因として、独立型社会福祉士がソーシャルワーク専門職と一市民としての2つの立場から多面的に地域課題と課題の背景にある構造の発見、同一地域での継続的な活動をつうじた支援関係者との関係形成、創出された場での支援関係者の相互学習の3点が確認された。

2) 独立型社会福祉士によるコーディネート活動の成功要因と阻害要因

インタビュー調査からコーディネートの成功要因と阻害要因を抽出した結果、コーディネートの成功要因として、独立性と中立性が保障されたアドボカシー活動、地域や組織の構造理解、課題の共有化・可視化を図る場の創出の3点が確認された。また、疎外要因として、経済的不安定による利益率が高い事業の優先、利益相反への意識の低さ、苦情対応に関する仕組みの未整備の3点が確認された。

(4) 包括的相談支援体制における独立型社会福祉士によるコーディネート活動の有効性

量的および質的調査から、独立型社会福祉士によるコーディネートの有効性として、独立性と中立性が保障された事業体でのアドボカシー活動、専門職と市民の2つの立場から地域の歴史・文化・慣習および支援関係組織の構造理解、同一地域での継続的活動による支援関係者との信頼関係を基盤とした土着的（地域に根づいた）協働が確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 独立型社会福祉士によるコーディネート実践の構造と関連要因 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 弘前学院大学社会福祉学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 9-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 10 |
| 2. 論文標題 ドイツ世話法との比較にみるわが国の法定後見活動の特徴と課題 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 弘前学院大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学研究 | 6. 最初と最後の頁 53-82 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 12 |
| 2. 論文標題 1960年代以降のアメリカにおけるアドボカシー概念の変遷 - わが国の法定後見活動におけるアドボカシープロセスの分析項目の抽出を目的に - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 北星学園大学大学院論集 | 6. 最初と最後の頁 1-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 24 |
| 2. 論文標題 わが国の法定後見活動におけるアドボカシー概念の有効性 - アドボカシーの定義の内容分析から - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 北海道地域福祉研究 | 6. 最初と最後の頁 15-21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 法定後見活動におけるソーシャルワークアドボカシー活動の射程 - 「財産管理」「身上監護」「法律行為に付随する事務」の関係から - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 弘前学院大学社会福祉学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 17-35 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 9 |
| 2. 論文標題 法定後見活動におけるソーシャルワークの視点にもとづくアドボカシーの有効性 - アドボカシー概念における専門職アドボカシーの位置づけの分析から - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 弘前学院大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学研究 | 6. 最初と最後の頁 81-99 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 8 |
| 2. 論文標題 法定後見活動における独立型社会福祉士の独自性 独立型社会福祉士と勤務型社会福祉士の法定後見活動の比較から | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 弘前学院大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学研究 | 6. 最初と最後の頁 79-107 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 22 |
| 2. 論文標題 成年後見制度における権利擁護概念の検討 - 成年後見制度利用促進法を踏まえて - | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 北海道地域福祉研究 | 6. 最初と最後の頁 1-12 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 成年後見制度での地域連携ネットワークにおける独立型社会福祉士の役割 - コーディネートの担い手としての社会福祉士の位置づけ - | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 北海道地域福祉研究 | 6. 最初と最後の頁 21-37 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 9 |
| 2. 論文標題 成年後見活動における独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 北星学園大学大学院論集 | 6. 最初と最後の頁 1-17 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 小川幸裕 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 成年後見制度における社会福祉士に期待される役割 - 「成年後見関係事件の概況」の分析を中心に - | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 弘前学院大学社会福祉学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 1-16 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 0件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 独立型社会福祉士とは |
| 3. 学会等名 広島県社会福祉士会 独立型社会福祉士委員会 独立型社会福祉士実践報告会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 多元化する社会における独立型社会福祉士の役割について |
| 3. 学会等名 静岡県社会福祉士会独立型社会福祉士委員会 第10回 独立型社会福祉士実践報告会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 独立型社会福祉士の現状と課題、今後の展望 |
| 3. 学会等名 東京社会福祉士会独立型社会福祉士更新研修（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 独立型社会福祉士とは～独立型社会福祉士の現状と課題・展望～ |
| 3. 学会等名 宮城県社会福祉士会独立型社会福祉士委員会研修（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 独立型社会福祉士とは - 全国の動向・課題・展望 - |
| 3. 学会等名 青森県社会福祉士会独立型社会福祉士実践研究報告会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 独立型社会福祉士による法定後見活動の構造 |
| 3. 学会等名 第68回日本社会福祉学会秋季大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 独立型社会福祉士の概説 |
| 3. 学会等名 大阪府社会福祉士会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 法律専門職に求められる身上監護 社会福祉士の視点からー |
| 3. 学会等名 静岡県司法書士会・(公社)成年後見センター・リーガルサポート静岡支部 令和元年度第1回会員特別研修会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 ソーシャルワーカーとしての質の高い実践を担保するリスクマネジメント |
| 3. 学会等名 第16回独立型社会福祉士全国実践研究集会 第3部シンポジウム（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 法定後見制度における権利擁護概念に関する研究 |
| 3. 学会等名 日本社会福祉学会東北部会第18回研究大会宮城大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 成年後見制度における独立型社会福祉士に期待される役割 - コーディネートの担い手としての社会福祉士の位置づけと課題 - |
| 3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋季大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 地域共生社会において社会福祉士に期待される役割 |
| 3. 学会等名 青森県社会福祉士会中南支部拡大支部会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 社会福祉士による後見人等活動におけるソーシャルワーク - 独立型社会福祉士に着目して - |
| 3. 学会等名 日本社会福祉学会 東北部会第17回研究大会 山形大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 小川幸裕 |
| 2. 発表標題 社会福祉士による成年後見人活動における意識変容プロセス - 独立型社会福祉士による活動に着目して - |
| 3. 学会等名 第65回 日本社会福祉学会 秋季大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 青森県福祉課題研究会 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 泰斗舎 | 5. 総ページ数 183 |
| 3. 書名 福祉課題への挑戦～青森の未来へ～ | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 日本社会福祉学会東北部会 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 全国コミュニティライフサポートセンター | 5. 総ページ数 298 |
| 3. 書名 東北の社会福祉研究：日本社会福祉学会東北部会60周年記念誌 | |

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 青森県福祉課題研究会 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 泰斗舎 | 5. 総ページ数 192 |
| 3. 書名 続・福祉課題への挑戦 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

「独立型社会福祉士の活動についてのアンケート」集計結果報告
<https://independent-sw.jimdofree.com/>

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|